

第一回

柔道  
技  
史  
攷

津  
村  
弘  
三

本稿表題「柔道技史攷」<sup>じゅうどうわざしこう</sup>は、昭和

10年に櫻庭武八段<sup>さくらばたけし</sup>によって上梓された名著『柔道史攷』からいただいた。同書は、私が中学校3年生になり愛知県柔道連盟（当時協会）の推薦で初段に昇段したときに、恩師の愛知県警察小田和男八段から「講道館の有段者になったからにはこれを読んどきなさい」と渡された思い出の本である。先生が貸してくださったのは発行当時の原本だったわけだが、大学を卒業して講道館に就職した翌年の昭和59年に再刊行され、懐かしくすぐに入手して再読した。

この本の巻頭の「自序」で、櫻庭八段は記されている。

「故きを温ねて新しきを知るといふ。云い古されたことではあるが、永久の真理である。すべて事物について、その理想を明らかにし、その新たな生命を発展せしめて行こうとするには、まずそのよつて起これ

る所以、経過し来れる歴史の正しき認識を持つことが根本事である」。

この趣旨にならない、今回機会をいただいたので、技の変遷史<sup>た</sup>を攷<sup>かんが</sup>えながら、講道館柔道のあるべき姿を再確認していきたいと思う。

種々の技についてみる前に、先ずは技の分類について確認する。柔道の技は投技・固技・当身技<sup>あてみわざ</sup>で構成されるが、それぞれの意味と目的についてである。

## 投技Ⅱ 投げる

師範は、投技とは何かについて明治21年8月頃にまとめられた『柔道雑記』に「投<sup>な</sup>とは体及び四肢の作用により相手の体をして起立の権衝<sup>けんしゅう</sup>（つりあい・均衡）を失わしめ、以って地上に倒し或は落として、彼をして我より襲い易き位置にあらしむるか、又は苦痛を感じしむるか、或

は死に至らしむるの法なり」と述べられている。

ここで注目すべきことは「起立の権衝」、すなわち「釣り合いよく立っている」ということが前提になっていることだ。つまり、立っている相手を倒すことが「投げる」ということになる。昨今の国際大会で、立っているとはいえない相手の背中を畳につける動作を投技として評価してしまう場面が多々見受けられるが、あれらは本来「投げた」と言えないのだ。

投技は先ず「立技」と「捨身技」に分けて考える。

「立業<sup>たちわざ</sup>とは、腰投でも背負投でも何でも、立っているながら対手<sup>あいて</sup>を投げる業<sup>わざ</sup>をことごとく含む」

「捨身業<sup>すてみわざ</sup>とは、真仰向けに身を捨てて投げるのも横向きに身を捨てて投げるのも、もちろんその中にある」

（「講道館柔道臨時講義柔道乱捕勝<sup>らんとり</sup>

負審判法に就いて『国士』明治33年)

立技の「**立っていな**がら」は言うまでもないが、捨身技の「**身を捨て**て」はその前提条件は「**立っている**」にほかならないのだから、いずれも立ち姿勢から施すということになる。立っていない姿勢から相手を倒しても、それは投技とはみなされない。

国際柔道連盟が、立ち姿勢からいきなり尻をついて小内刈のように相手の足を刈って後ろに倒した試合映像を送ってきて、その技名称を問い合わせてきたことがあった。寝技巧者が立ち姿勢から寝勝負に移るために用いた「草刈り」と呼ばれる巧みな技法ではあったが「投技ではない」と回答した。柔道技術には「寝技への移行動作」という範疇がある。今や忘れかけられがちなので「あった」といふべきか。今一度思い返すべきである。

これら2点、相手の体勢、自分の

体勢の条件を合わせると、投技とは「立ち姿勢の相手を立ち姿勢から倒す技」と定義することができると、

投げられる相手の体勢について、前出、明治33年の審判法解説で、以下のように相手を仰向けに投げることの理由について述べられている。

「(口)「大体に於て仰向けに倒ること」の意味は、人の倒れるとき俯伏しときは勿論、横向きに倒れても多くは手について見事に倒れぬものである。仰向けに倒れるときは見事に倒れる場合が多い」

さらに大正5年の審判規程改正に伴う解説では、詳しく以下のように示された。

「人は俯伏しに投げられる時は、可なりの勢いで倒れても両手を突くことが出来るから、格別苦痛を感じないばかりでなく、すぐに起き上がる事が出来る。横向きに投げられても格別強く倒されぬ以上は略同様で

あるから、投は仰向けに倒すことを原則とするのである」(『柔道本義柔道審判規程解説』『柔道』大正5年)

立技は、手技・腰技・足技に分類されることは周知のとおりだが、師範は「何れの技でも手も足も腰も使用、就中腰の動きが最も大切であるが、便宜上その働きが比較的目に立つ所からそういう分類をした」(『柔道教本』昭和6年)と解説されている。この分類法は、修行者が技を学ぶとき、また指導者が教えるにあたり、着意すべき点を知るよき指針となっている。

捨身技は、真捨身技と横捨身技に分類されるが、その「真」と「横」について、往々にして勘違いがみられる。師範は「真捨身技として自分は真後ろ向きに倒れながら相手を投げるのと、横捨身技として自分は横向きに倒れながら相手を投げる」(『柔道一班ならびにその教育上の価値』明





真捨身

治22年、以下『柔道一班』と説かれているが、この「真後ろ向き」と「横向き」というのが、体位のことか身を捨てる方向のことか、この文章では判然としない。おおむね後者、体を捨てる方向と解釈されていることが多いようで、「横捨身技の巴投」と



横捨身

いった解説や記述がみられることが多々ある。しかし、「真」と「横」の棲み分けは、仰向け、すなわち背中をつけるか、横向き、脇をつけるかの違いを示すのが本来の意味である。山下義韶<sup>よしたつぐ</sup>十段・永岡秀一<sup>ひでいち</sup>十段・村上邦夫八段共述による「柔道本義柔道



横捨身(巻き込み)

形解説」(『柔道』大正4年)にある「真捨身業と云うのは、己が業を掛ける時に己の体を仰向けに捨てるから真捨身業と云うのである。横捨身業は、己の体を横向きに、即ち脇腹が畳につく様に捨てるので、横捨身技と云うのである」が、最もはつき

りした表現だろう。従って、いわゆる「横巴」は脇腹から身を捨てるわけではなく背中では畳についているのだから、真捨身技にはかならない。

いわゆる巻き込み技も横捨身技である。学校講道館錬成科の授業で内巻込を醍醐敏郎十段にご指導いただいていたときに、そっくり返って相手に背中を向けるまで巻き込んだ私に「柔道は武術だ。できるだけ相手に背中を向けるべきではない。横向きに捨てるだけで十分なのだからそこまで巻き込むな」とご注意ください。そこには「精力最善活用」の示唆も含まれていたことと、今にしていると思う。

## 固技Ⅱ固める

固めるとは何か。「講道館柔道講義」(『国土』明治32年)には「固は相手を制して自由の利かぬようにする

ことをいう」とある。師範は勝負、すなわち武術とは「肉体上で人を制し、人に制せられざる術」(『柔道一班』)と定義づけられている。武術としての固技において制するということは、動けぬようにして捕縛する、とどめを刺すという最終目的をなすための準備局面といえるので、私は「制するとは生殺与奪の権を握ること、つまり生かすも殺すも俺次第の境地」と説明している。

固技には「相手の咽喉<sup>のど</sup>か胴かを絞めて苦しめるか殺すかすること、相手の体とか四肢とかの全部か局部かを抑えなり押しなりして苦しめるか、起きられぬようにするかのことと、相手の関節を無理に伸ばすか、曲げるか、又は振じるかして倒すか、苦しめるか、殺すかすることのうち、いずれかを致す」(『柔道一班』)と師範が解説されているとおり、抑込技(古くは抑技という表現も見られた

が、現在は抑込技と統一されている)、絞技、関節技がある。

抑込技について師範は「相手の体を抑えつけるにはいろいろの方法がございますが、それらは本真の勝負の上から申せば格別有益ではございませぬ。抑え付けることに熟達する



胴を絞める



首関節の逆をとる

よりも、むしろ抑え付けられたとき起きる方に熟練することがかえって必要なくらいです。しかし、起きることの修行をするには、必ず抑えることの修行も致さねばなりません」

（『柔道一Class』と、起きること、抑えを解く技術の習得の重要性を述べられていることが示唆深い。昨今の

国際大会で見られる「抑え込まれてすぐ参り」の風潮はいかがなものか。

絞技に「胴かを絞めて」とあることから、胴絞も柔道の技として確乎として認識されていたことがわかる。

また、ここに関節技の目的の一つに「殺すか」とあることに違和感をおぼえるかもしれない。現在の乱取、

それを競技化した試合においては関節技Ⅱ肘関節という認識しかないが、元来関節の逆をとるのは肘関節だけが対象だったわけではない。固の形に膝関節をとる足蹴があることから分かる。関節技には頸椎を傷める技法も存在し、その結果は死に至らしめることが可能だった。師範は明治22年の時点では、「頸の関節を振じたり、伸ばしたり、または曲げたりすることは、よ

ほど効験ききめのある手です」（『柔道一Class』と述べられている。

### 当身技Ⅱ当てる

「当技あてわざ」とも呼ばれたが、現在は当身技と表現されることが多い。こも師範による解説を引用する。

「当は、急所あそを手、足、または頭で突き、蹴り、打ち等することをいう」（「じうどう」『日本百科大辞典』明治43年）

急所と呼ばれる生体上の弱点に対して「突く」「打つ」「蹴る」といった攻撃を加えるのが当身技である。師範は当初から当身技は乱取で行うと危険なので「形」で学ぶのみとしていたが、「打ったり突いたりするときには手袋のようなものでも嵌はめて致しますれば、勝負法の乱捕もずいぶん出来ぬこともございませぬ」（『柔道一Class』と、乱取で当身技も稽古でき



るように工夫することをお考えだったようだ。

“蹴る”は分かりきったことだが“打つ”と“突く”にどのような棲み分けがあるか、醍醐十段に伺ったことがある。先生は“**突く**”は直線的な、**従って短いストローク**、“**打つ**”は**曲線的なやや長いストローク**、**まあ絶対というわけではないようだが**”と笑っておられた。

師範もこの分け方に疑問をもたれたのであろうか、技術を解説された最後の著作となった『柔道教本』では“**臂当**”“**脚当**”という類別を使われている。

当てる主体、すなわち攻撃する側の身体部位を“**当所**”と呼び、**極の形**、**柔の形**、**講道館護身術**では**指先**・**拳**・**手刀**・**掌底**・**手甲**・**手のひら**・**肘**・**膝頭**・**蹠頭**（足裏の足趾付け根）・**足刀**・**踵**などを用いる技法がある。拳には**前面**、即ち**指側**を当てる

場合と別に、**甲側**を当てる**裏拳**、**小指側**の側面を当てる**渦巻**の呼称もある。

当てられる客体、すなわち急所は『柔道教本』では**天倒**（**頭頂**）・**烏兎**（**眉間**）・**霞**（**こめかみ**）・**人中**（**鼻と唇の間の溝**）・**独鈷**（**下顎のつけ根**）・**水月**（**みぞおち**）・**月影**（**左肋骨下部**）・**電光**（**右肋骨下部**）・**明星**（**下腹**）・**釣鐘**（**睪丸**）・**膝関節**が示されている。古流柔術諸流にはさまざまな急所が伝えられ、また空手道などの他道・術でも急所の指定があり、さらにはボクシングでも**テンブル**・**チン**・**レバー**などへのパンチが有効打とされている。これらは、柔道の急所とほぼ通じた位置となっている。

当身技は、乱取で修行する投技・固技と比して発展がみられなかったようにみえるが、師範は明治の終わり頃に“**擬働体操**”（『中等教育』明治

42年）、あるいは“**摸道体操**”（『成功』同年）と呼ぶ体育法を紹介され、その中に“**四方蹴**”“**四方当**”という当身技由来の動作が組み込まれている。大正時代の終わり頃には当身技の体育法としてのさらなる組織化に取り組まれ、雑誌『中学世界』大正15年10月号で「柔道当身応用新案体育法」として紹介している。これらは“国民体育”の名のもとに完成され、講道館文化会が『攻防式国民体育』（昭和3年）、『精力善用国民体育』（5年）を発刊し、普及が図られた。

師範は当身技を体育法として利用することだけをお考えになっていたわけではなく、本来の武術としての在り方についても重要視されていたことが以下の論述から分かる。

「従来は形を練習して当身の練習をすることになっていた。しかし、従来の方法ではよほどしばしば繰り返して練習しないと当身がさえて効



精力善用国民体育  
単独動作第一類 大五方当「大前当」

くまでにならぬ。なぜならば、当身はいろいろの動作の間に混じていて、仮に一時間続けて練習しても、突くとか蹴るとかいうようなことは、限りある回数しか練習しない。(略)私の考案による精力善用国民体育の単独練習のごときは、続けざまに何回となく各種の当身の練習をするので

あるから、自然に技がさえてくる。昔の仕方では形を相当永く練習しても単独練習で日々鍛えるほどには技がさえ難い」「いかにすれば今日の柔道を国民の柔道となし得るか『柔道』昭和7年) 100技、100技というが、投技と固技だけで当身技の名称の定めがない」という声を聞く。

精力善用国民体育には「後当」「前当」などの名称があるが、これらは技の名称ではなく動作の呼称であるともいえる。松岡辰三郎八段は「當技の研究」(『柔道』昭和18年)で「前方拳打」「前方拳突」といった呼称法を提案している。しかし、当身技は当所と急所の

組み合わせなのである。前者はその双方とも分ならず、後者は急所が分らない。私は、当所と急所を組み合わせ、さらに「打つ」「突く」「蹴る」を総じて「当てる」と表現すれば、その動作の全体像を示すことができる。と考える。これによれば、投の形で受が取を打つ動作は「渦巻天倒当て」、極の形、居取の摺上で取が受を蹴る動作は「蹠頭水月当て」と呼ぶということになる。

師範は天神真楊流と起倒流の師のもとで修行された。この二流の特徴について次のように述べられている。「起倒流の形は、もと鎧組打の投げ手として工夫したものであり、天神真楊流の形は、平服のものを、あるいは投げ、あるいは当て、あるいは捕らえる修行として工夫したものであるから、おのおの仕方にも心を用うる点にもよほど相違がある。(略)この二流を学ぶときは、長短





精力善用国民体育 相对動作第一類(極式)  
居取「逆手取」(膝を水月に当てる)

相補うて、勝負の方法全体に通ずる  
に大層便利がよい」(「講道館柔道講  
義」『国士』明治31年)

投技に秀でた起倒流、固技と当身  
技を得意とした天神真楊流の二流を  
学ばれた師範によって、投げる・固  
める・当てる、三つの部門による講  
道館柔道が誇る多種多様な技術体系

が構築された。また、柔術  
は“形”だけで修行する流  
派、乱取はしてもその比重  
が軽かった流派が多かった  
ようだが、天神真楊流と起  
倒流は乱取稽古も盛んに行  
っていたことが「柔道家と  
しての嘉納治五郎」(師範講  
述・落合寅平氏筆録『作興』  
昭和2年)に、師範が二番  
目に師事した天神真楊流の  
磯正智師の道場では、形と  
乱取の稽古がほぼ半々であ  
ったことが記されているこ

とから分かる。師範が形だけの流派  
を修行しておられたならば、乱取に  
よる変幻自在な攻撃防御の妙は生ま  
れることがなかっただろう。

冒頭で申し上げたとおり、今回は  
初回なので技の分類についてまとめ  
させていただいた。今後は“史攷”

の標題に沿うべく、技の発展・変遷  
を眺めていこうと思う。師範は多く  
の著述・論述を残されているので取  
り留めもないものにならないか不安  
ではあるが、要所を抽出し、他の先  
達方の解説も交えて述べさせていた  
だくことになる。また、この機会  
に、直接ご指導いただいた安部一郎  
十段、醍醐敏郎十段の教えも紹介さ  
せていただきたいと考えている。

次回は、現在確認できる師範がま  
とめられた最古の資料である明治20  
年頃の技名称一覧をみてみたい。

(技術専門官)

- ・本稿記載の段位はすべて最終段位
- ・引用文は必要に応じて現代仮名使い、  
漢字用法に直した

演技者 畠山 洋平六段(編集部)

岩永 憲門五段(審議部・国際部)

題字 益田 美樹女子二段